

SANAA 建築の冒険

2010年プリツカー賞（建築界のノーベル賞）受賞



世界建築の先頭に立つ日本人建築家たち、その中心が「SANAA」。妹島和世、西沢立衛、2人のユニットだ。世界の注目を集めたルーブル美術館の新館が去年12月にオープン。特殊なガラス、アルミを駆使した斬新な建物は絶賛された。総工費1000億円超の日本の新国立競技場の国際コンペでは世界中のライバルとの闘いとなった。被災地では住民とともに新たな街を模索する。“日本発”建築革命...その発想を詳細に見つめていく。

フランスの大統領フランソワ・オランドがルーブル・ランスの完成を祝福し、妹島(せじま)和世と西沢立衛からなる日本人の2人組の建築家SANAAを褒め称えた。SANAAが設計したルーブル・ランスは、世界が目にするルーブル美術館の新館である。

日本よりも海外で知名度の高い建築家SANAAの日本における代表作は、金沢21世紀美術館である。これまでの建築の常識を打ち破り、すべての人に開かれた空間を実現し、ヴェネチアビエンナーレ国際建築展で金獅子賞を受賞した。世界で最も尊敬される日本人の仲間入りをしたSANAAの2人だが、建築の仕事始めた頃にバブルが崩壊し、どん底で明日をも知れぬ毎日を送っていた。日本人建築家SANAAの軌跡をたどり、建築が開く未来を見つめる。

2004年、パリのルーブル美術館はランス新館のために大規模な設計コンペを計画。SANAAを始め世界中の建築家がコンペに参加し、120を超える野心的なプランが集まった。シンプルで抑制されたデザインを設計案を提案したSANAAにとって、最大の強敵はプリツカー賞を女性で初めて受賞したザハ・ハディッドだった。ザハの壮大なデザインは審査員を圧した。

炭鉱の衰退と共に寂れたランスにおいて、地元の政治家はザハのプランに期待していた。しかし、ザハのプランにルーブル美術館に君臨するロワレット館長は、真っ向から異論を唱えた。当時、フランスでは無名だったSANAAは環境への配慮が認められ、有力候補に浮上した。2005年9月26日、最終審査が行われ、SANAAがコンペで勝利した。

コンペから7年、ルーブル・ランスはようやく完成した。人々はSANAA建築の美しさに目を見張った。なぜヨーロッパで高く評価されるのか、欧米の知識人は桂離宮など日本の伝統に通じる美しさを指摘する。

妹島和世さんは1956年、茨城県日立市の海の近い町で生まれた。子供の頃は原っぱで遊ぶのが大好きで、捨てられた木箱を使って家をたて、原始人の家と名付けた。また、母の読んでいた雑誌に掲載されていた建築の写真に衝撃を受け、家というものを考えさせられた。妹島さんは1975年に日本女子大学に入学した時、再びその写真を見た。写真に写っていた家は1958年に巨匠・菊竹清訓の建築したスカイハウスという家だった。日本はやがてバブルを迎え町の様子も様変わりしたが、妹島さんは周囲の環境をかき乱すバブル建築に対し「商業の論理だけが特化しているのは寂しい」と疑問を感じていた。

6年間設計事務所で修行した妹島さんは、1987年に独立して妹島和世建築設計事務所を設立した。しかし1990年にはバブルが崩壊し、深刻な不況が始まった。一旦は建築の仕事を諦めた妹島さんだが、解散直前になって、若い女子80人が共に暮らす再春館製薬女子寮(熊本市)の設計のコンペに参加するチャンスが与えられた。

このコンペには、大学院を卒業したばかりの若い建築士西沢立衛さんも駆り出され、リビングを広く構えた「みんなの家」の構想を共に描いた。その結果、採用の電話をもらい、日本建築家協会新人賞を受賞した。このコンペが妹島さんの出発点となった。

妹島さんの建築を紹介した日本の雑誌が、アメリカで目に止まり、ニューヨーク近代美術館のライト・コンストラクション展に招待された。カタログの拍子飾ったのは無名に等しい妹島の建築の写真だったが、「軽やかで透明感のある新しい建築」として注目を浴びた。

海の向こうからコンペの招待状が届くようになった。1995年、妹島と西沢は共同設計チームSANAAを結成し、背水の陣を敷き海外のコンペに挑んだ。だが、SANAAは立て続けに海外のコンペをものにし、オランダのスタッドシアターやドイツのフォルツェライン・スクール、スイスのROLEXラーニングセンターなど、ヨーロッパで極めて高い評価を獲得した。パワリーの街に溶け込むニューミュージアムは、箱をずらしながら積み上げた形が目を引く。

10年前、妹島と西沢が訪れた頃、パワリーは荒れ果てた街だった。コンペに参加したSANAAにとって最大の難問は、ニューヨークの厳しい建築規制だった。規制を守れば建物はどれも同じ形になってしまうが、SANAAの設計案だけが他とは違っていた。妹島と西沢は建物の規模を小さくすれば、周囲の建物とのバランスが良くなることに気がついた。ニューミュージアムの周辺には60を超えるギャラリーが新しくオープンし、パワリーは最先端のアートを発信する街へ生まれ変わった。

バブル崩壊後の逆境から出発したSANAAは、2010年にプリツカー賞(建築界のノーベル賞)を受賞した。2人の名声は日本よりも先に海外で頂点に達した。日本では、大都市の巨大プロジェクトは大手設計事務所やゼネコンが一手に引き受けている。SANAAも、日本で手がけた設計の多くは大倉山の集合住宅や豊田市生涯学習センター逢妻交流館、ディオール表参道、犬島「家プロジェクト」など地方の公共建築や小さな住宅ばかりだが、どの建築も独創性が溢れている。東京都蒲田にある森山邸は、部屋同士が独立して間が庭に有り、風呂などは露天風呂のようにして雨の日も雪の日も楽しめる。設計者の西沢立衛さんは「住宅としてもつまなく暮らすよりは楽しく住みたいと、僕達建築家は考える」と語る。

香川県の豊島美術館に展示されているのは、内藤礼氏の作品「母型」ただひとつ。豊島は古くから清い湧き水に恵まれ、人々はその恵みを大切に暮らしてきた。しかしバブル全盛のころ、豊島は大都市から93万8000tのゴミが不法投棄された。有害物質が海や土壌を汚染し、建築の廃材も打ち捨てられた。島の人々は38年の歳月をかけて行政と戦った。瀬戸内の風土に深い思い入れを持つ福武總一郎氏は、豊島再生のシンボルとなる豊島美術館の創設を決意し、SANAAの西沢立衛さんに建築を依頼した。西沢さんは水滴のような自由な曲線を思い描き、2012年、出来上がった美術館は日本建築学会賞を受賞した。

2012年、夏から秋にかけてSANAA事務所は新国立競技場計画のコンペに取り掛かった。会議は毎日のように続き、さまざまな案が検討された。2ヶ月の間の会議の中で、神宮の森に開かれ、訪れる人々の交流を促す「公園のようなスタジアム」が、SANAAの最終設計案となった。

2012年11月7日、日本を代表する建築家・安藤忠雄氏を審査委員長に、新国立競技場設計者を決める最終審査会が東京・千駄木で開かれた。予備審査で最も高い得点を獲得したのは、ルーブルランスのコンペで、わずか1票差でSANAAに敗れたイギリスの建築家、ザハ・ハディッド氏の設計案で、高得点の理由は「圧倒的な造形の迫力」だった。SANAAの設計は周りの環境に溶け込む設計が高く評価される一方で、開放的な空間のありかたに疑問をもつ審査員もいた。審査の結果、新国立競技場のデザインには、ザハ・ハディッドの設計案が選ばれた。

今回の審査会の結果について、妹島さんは「コンペを主催した側の人の求めているものと自分の『出来た』と思うものは違う」と語り、西沢さんは「僕らは『その時代につながったものをつくりたい』『その時代を超えたものを作りたい』と矛盾した気持ちを抱えている」と話した。東日本大震災は建築家に計り知れない衝撃を与え、多くの建築家がこれまでの建築のあり方に疑問を抱いた。このままでは住民が置き去りにされたまま個性のないまちづくりが進む恐れがあるとして、5人の建築家が被災地を支援するグループを結成し、妹島も参加した。震災から1年7か月、宮戸に「みんなの家」が完成した。2012年12月23日、仮設住宅で暮らす人々が集まり、みんなの家で初めての忘年会が開かれた。宮城県東松島市宮戸は3つの漁村が壊滅した。130世帯の人々が住み慣れた浜を離れたが、仮設住宅には隣人と話しをする場所もない。SANAAはボランティアで設計に取り組み、被災者と過ごしながらか共に建築を作る喜びを味わった。